アルコール留学

2014 年から 2015 年にかけての約１年間、交換留学生としてフランスのリヨンに滞在していた。フルヴィエールの丘のうえに建つ大聖堂、その麓に広がる旧市街、街を悠々と流れるローヌ川とソーヌ川・・・リヨンという街は、自然や歴史ある建物に囲まれていながらも商業施設や交通が発展していたため、のびのびとした快適な留学生活を送ることができた。

勉強もさることながら、１日の１番の楽しみは、部屋でお酒を飲むことにあった。フランスのスーパーの棚には、安価なワインが並んでいて、３ユーロもあれば美味しいワインに出会えるのだ。そして気づくとわたしの部屋の棚の一番上の段には、お酒の空き瓶がずらりと整列していて、それをまとめて捨てるのが習慣になった。

私の住んでいた地域では、空き瓶はリサイクルボックスに捨てることになっていた。１ヶ月に１回ほど、大型スーパーの丈夫な買い物袋に瓶を詰めて、家から少し離れたその場所に捨てにいく。等身大のかぼちゃの馬車みたいな形をしたボックスには、まるい穴がいくつも空いていて、そこから空き瓶を投げ入れる。ガシャン、ガシャン。いくつも捨てていると、だんだんとリズムも速くなってくる。ガシャン、ガシャン。ガシャン、ガシャン。いつだか、通りすがりの見知らぬ学生たちが歓声をあげたこともある。« Beaucoup d’alcool !! » 私も思わず笑ってしまう。彼らからすると幾分幼い顔をした外国人が、大量の空き瓶を捨てているのが新鮮に映ったに違いない。これが日本だったら・・・横目でちらっと見られて、影で「アル中女」に認定されてしまいそう。お酒に寛容な国、フランス万歳！

岩崎　ちまき（学部４年）

写真１ 棚の上の空き瓶

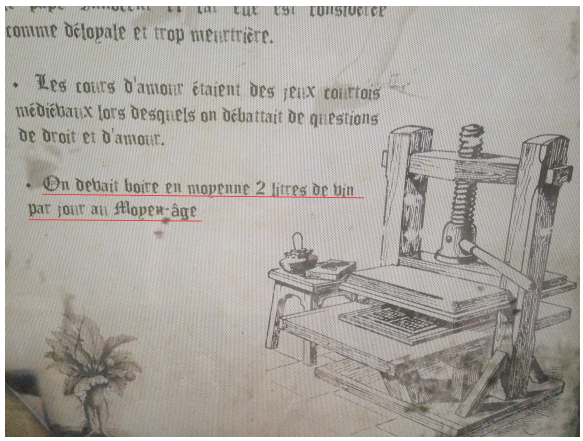

写真２　リヨンの旧市街の壁の文句
（中世の時代、人々は１日あたりおよそ２リットルのワインを飲んでいたにちがいない。）